

「アフロアジア」について

江村, 裕文

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

38

(発行年 / Year)

2014-04

「アフロアジア」について

江村 裕文

今私の手元には最近資料室で購入した一冊の洋書がある。Zygmunt Frajzyngier と Erin Shay の編集による「The Afroasiatic Languages」で、ケンブリッジ大学の出版局から 2012 年に第一刷が出版されたものである（購入は 2013 年 6 月 1 日）。この書籍の題名を見ても理解できるように、「Afroasiatic」つまり「アフロアジア」という呼称は、世界的にかなり通用する一般的な呼称であることがわかる。「アフロアジア」という呼称を題名に使用した、日本語で書かれた最初の書物は、筆者も関係した、山川出版社から出版された〈民族の世界史〉というシリーズの第 11 巻『アフロアジアの民族と文化』（1985 年）であろう。

この本の中で筆者は「スワヒリ語の世界」という部分を執筆したが、本稿では、「アフロアジア」という呼称そのものの解説を試みたい。

というのは、この地域の言語・歴史・宗教等に関係する専門家（たち）にとっては常識となりつつあるこの呼称の内容や意味について日本ではまだまだ人口に膾炙しているとは言えないようだからである。

実はこの書物の「序章」がまさに〈「アフロアジア」とは何か〉と題されている。だからこれを読めばこの呼称になじみがない人でも、「アフロアジア」とは何かがわかるはずなのだ。しかしあえてここではその内容の概略をわかりやすく解説してみたい。この小論が、この呼称およびこの呼称があらわす内容や意味について理解をしていただく道案内になればと願っている。

現在「アフロアジア」という呼称で呼ばれている地域は、地理的名

称として、以前は「オリエント」「中東」「中近東」「中東・北アフリカ」「西アジア」等と呼びならわされてきた。

「オリエント」というのは「陽の昇るところ」といった意味で、「陽の沈むところ」を表す「オクシダント」と対応する。この「陽の昇るところ」「陽の沈むところ」はヨーロッパを中心にとらえたとらえ方である。

また「中東」「中近東」「中東・北アフリカ」というのは、例えば日本を「極東」と呼ぶようなとらえかたを基本にしている呼称で、これも具体的にはイギリスを中心にとらえたとらえ方である。

「西アジア」は、アジアの西の方ということだから、そういう意味ではあまりバイアスがかかっていない呼称だといえるが、これではサハラ砂漠以北の北アフリカ地域が入ってこない。

こういった、ある地域なり国を基準にした地域の命名が不適切であるというのは論を待たないであろう。

この地域は、文明論的に、アラビア地域という呼び方がなされることがある。これもまた不適切である。もちろんこの地域にはアラブ諸国を多く含むが、そのど真ん中に存在するイスラエルはアラブではない。またイランやトルコも含めるとすれば、イランやトルコもアラブではない。

宗教的に、イスラム世界あるいはイスラム文明圏と呼ばれることもある。これも不適切である。イスラームという宗教の広がりには、はるかにこの地域をはみ出している。国民の大多数がムスリムであるインドネシアもこの地域に入れなければならないし、イスラム教徒がいる地域がイスラム圏であるという言い方をすれば、旧ソ連の中央アジアや中国、アメリカ合衆国もイスラム圏ということになる。

では、一つのまとまりを示していると考えられるこの（いわゆる「アフロアジア」）地域を、なぜ「アフロアジア」と呼ぶようになったのか。

この呼称は、実は言語学的観点で付けられた名称なのであって、本来的に上で述べたような地理的あるいは文明論的、宗教的観点からの名称ではない。

ことの起こりは、「セム（・ハム）語族」という呼称の起源にかかわる。

現在「アフロアジア」と呼んでいる地域の一群の諸言語に対して「セム語族」という名を初めて与えたのは、ドイツ人のシュレーツァー（A. L. von Schläzer）で、彼は 1781 年に『カルデア人について』という本の 161 ページに、以下のように述べている。

「地中海からユーフラテスまで、メソポタミアから下ってアラビアまで、周知のように唯一つの言語が支配していた。即ちシリア人、バビロニア人、ヘブライ人そしてアラビア人は一つの民であった。またフェニキア人（ハム人）もこの言語を話していた。—それを私はセム語と名付けようと思う。」

この命名が旧約聖書創世記第 10 章に見られる、ノアの方舟のエピソードで知られる、ノアの三人の息子（セム・ハム・ヤペテ）の名に由来することは明らかである。シュレーツァーが言語と民族とを同一視しているのは問題であるが、それはさておき、当時まで漠然と「東洋」語、「近東の」諸言語と呼ばれてきた言語群を一つのグループとして「セム（semitisch）」語という名の下にまとめようとしたのは、やはりこれらの言語間に多くの類似点を認めたからではないだろうか。ただ当時（18 世紀末）は、彼があげた民族のうちのバビロニア人についてはその言語—アッカド語—は未だ解読されてはおらず、フェニキア語も徐々にその姿が明らかになって来たばかりである。

ヘブライ語とアラム語との類似、更にはアラビア語との類似もユダヤの学者たちには早くから知られていた。ヨーロッパの学者たちも 16 世紀、17 世紀にはエチオピア語をも加えてそれらの言語について類似性を指摘している。

では、現在もっとも一般的に行われている分類に従って、セム語内でまとまった資料を持つ言語をあげてみたい。東セム語はメソポタミア地方、北西セム語はシリア・パレスチナ、南西セム語はアラビア半島というのが基本的分布である。

I 東セム語 アッカド語（バビロニア語・アッシリア語等）

II 西セム語

(1) 北西セム語

カナアン（カナン）語—ウガリト語、フェニキア語、ヘブライ語

アラム語—古典アラム語、ナバタイ語、パルミラ語、マンダ語、バビロニア・タルムード語・古典シリア語他

(2) 南西セム語

アラビア語—古典アラビア語、アラビア語諸方言

南アラビア語—アラビア半島古代諸語、エチオピア諸語（ゲエズ語、ティグレ語、ティグリニャ語、アムハラ語）

これらに対して、コプト語および 1822 年以降漸次明らかになったヒエログリフ（聖刻文字）・エジプト語、ベルベル語などに対しては、ノアのもう一人の息子、ハムの名をつけたハム語族という呼称が使われるようになった。これは F. ミュラーが 1887 年に用いたのが最初であるといわれる。今日ハム語族はほぼ次のように分類されている。

(1) エジプト・コプト語

(2) リビア・ベルベル語

(3) クシュ語

(4) チャド語

しかしこれらのうち、古い文献をもつのは (1) のエジプト・コプ

ト語（他には（2）のロビア語がごく少し）のみであり、また各言語間の対応関係もそれほど明らかになっていないわけではない。したがって今日の比較言語学の立場からいえば、「ハム語族」はまだ確立したとはいえない。

上述の二つの語族、すなわち「セム語族」と「ハム語族」に系統上のつながりを認めようとして生じたのが「セム・ハム語族」あるいは「ハム・セム語族」という呼称であって、M. コエンおよび D. コエンの「ハム・セム語族」論および I.M. ディアコノフの「セム・ハム語族」論に代表される。上述のように、「ハム語族」そのものの成立には問題があるが、ハム語といわれる各言語とセム語との個別的比較から、よりさかのぼった時期におけるつながりが認められるようになったといえる。

ここでやっと「アフロアジア」という呼称の登場となる。アメリカの言語学者グリーンバーグが、それまで使われていた「セム・ハム語族」という呼称があまりにも神話的であるから、その代わりに「アフロ・アジアティック（アフロアジア語族）」と呼んだらどうかという提案を、1952年に行った。この場合のアフロアジア語族というのは、「ユーラシア」がユーロつまりヨーロッパ大陸とアジア大陸の全体をあわせた地域の呼称となっているのに対して）アフリカ大陸とアジア大陸にまたがる語族という意味である。ここではセム語に対してエジプト語（ヒエログリフ・エジプト語、コプト語）、クシュ語、ベルベル語、チャド語が対等な形で対比される。

このグリーンバーグが提唱し、多くの言語学者が賛同した「アフロアジア語」という呼称は、その名が示すとおり言語学的概念であって、地域呼称ないし文明論、宗教的呼称ではない。しかし、この地域を呼ぶのに、先にあげた「オリент」や「中近東」、「アラブ」なり「アラビア」あるいは「イスラーム」といった呼称で呼ぶよりも、何らかのバイアスがかかっていないという点で、「アフロアジア」地域とい

う呼称がよりふさわしいということもできるだろう。

以上がこの地域を「アフロアジア」と呼ぶにいたった経緯の概略である。この内容をまとめるにあたっては、わが恩師故矢島文夫がその編者であった山川出版社の〈民族の世界史〉シリーズの第11巻『アフロアジアの民族と文化』（1985年刊）の序章の記述およびキリスト教図書出版社刊の『聖書ヘブライ語』（創刊号1984年刊）に掲載された柘植洋一氏の「セム語概観（1）」の記述を参考にした。記して感謝の念を表しておきたい。